

2021年

4月第3・4週の礼拝説教要約

・4月18日：ヨハネ福音書14:18-21.

『イエスを愛する』

・4月25日：ヨハネ福音書21:15-19.

『キリストを愛する』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

旧約聖書で定められた愛の掟(申命6章、レビ19章)を、暗唱できた律法学者が、暗唱ではなく、まさにその愛を、実践する気があるのかどうかを問題視した時のイエス・キリストの言葉がルカ福音書に記されています。イエスが用いた譬え話の中に出てくる祭司やレビ人は、律法学者と共にユダヤ民族をリードする立場の階層に属しています。ある時、彼らが前後して、それぞれ道を歩いていると、暴漢に襲われて路上に横たわる身元不明の怪我人が目に留まります。けれども、どちらも、ただ一瞥しただけで、現場を立ち去りました。

その後、同じように現場を通り掛かる非ユダヤ人のサマリア人だけが、横たわる怪我人を介抱し安全な場所に宿泊させて、その費用まで負担します。こうして成立する隣人愛の出所こそ、隣人となってくれたサマリア人であるとの見解は、愛の掟を暗唱できた律法学者にも理解可能なことでした。ただ、イエスが示唆していることは、律法学者が愛の実践の機会を得ても躊躇なく、同じ行動がとれるのかどうかです。

社会が混乱を極めると、誰もが口にする言葉があります。性善説と性悪説です。一つの政策の実現においてこの両説が試される場合、成功と失敗は、例えば緊急事態における社会の協力やワクチン接種の平等な実施などといった問題に直結します。

ユダヤの律法では人心の混乱に先んじてこう命じます、「あなたの神である主を愛しなさい」と。これは律法学者が暗唱したことと同じです。モーセから伝えられた掟には、残念ながら「愛の実践」の具体例は示されません。神を愛することも、隣人を愛することも。神と人を愛している人とは誰なのか、神に愛される人とは誰なのか、そもそも、人が愛すべき神とはどのようなお方なのか。

掟を暗唱し、その掟に支配されるユダヤ人にとって、「愛」とは、一体何であるのか、これが一つの抽象概念にとどまっていることをイエスはサマリア人における真の愛の実践をとおして律法学者に示します。

さらに、十字架に架かる前のイエスキリストは「私を見ている者は、父(なる神)を見ている」と教えました。その上で、「私を愛しなさい」と弟子たちに命じます。人が愛すべき神とは、まさに御自身であることを教えているのです。

全てに先立つ愛とは、その実践方法如何に関わらず、先ずはじめに、「あなたの神である主を愛すること」から始まります。それは人類にとっては目の前に現れていたイエス・キリストを愛することに他なりません。

ユダヤ民族が暗唱していた愛の掟は、時が満ちるに及んで姿を顕したナザレのイエスを愛することによって、漸く、実現します。この方は、人から愛される神であると同時に、父なる神から、「これは私の愛する子」と言われた人間でもあります。

この、人から愛される神が、父なる神から愛されている人間でもある時、この方を通して実現する愛とは、命を得た愛でありまた「交流する愛」でもあるのです。掟の中で暗唱されていた、絵に描いた餅の愛ではなく、神と人、人と人の関係の中で交流する愛です。さらに、この愛が交流してこそ、人は性悪説からも性善説からも解放されることになるのです。なぜなら、神と人、人と人の愛が交流している限り、もはや、人間が自分だけの性分にとどまり続けることはないからです。

こうして愛は、交流と実践を通して神から、その都度、補給されます。枯渴することもないければ、調達される必要もないのです。

イエスが天に帰られた後に、弟子たちが右往左往することもなく愛の実践に励むことができたのはそのためです。愛は必要な時に、必要な分だけ天の神から供給されました。彼らがキリストを愛する時に、愛は過たずこの世に実現してゆきました。

イエス・キリストを愛すること、これが全ての起点になることを、聖書は人類に教えています。イエス・キリストご自身が、先ずは、弟子たちのために念には念をいれて諭した真理でした。

わたしたちも全く同じ恩恵に与ることのできる人間なのです。神と人とのつながりの中であって。